

旅団砲兵隊、旅団工兵隊、旅団通信隊

バスコは、パタン列島の中心にあり、元知事公舎を旅団本部とし、その隣が護衛隊長の宿舎でした。執筆者は護衛隊長の当番兵となる。島にはほとんど島民はいない。島の産物は陸稲と芋類が少しで、当番兵の任務は一日三回の飯上げ、掃除、洗濯、隊長の書類の整理でした。米軍の敵前上陸も予想され防備の設営の準備をしているが、空襲があっても島には防備がなく、蛸壺に飛び込んで敵機の去るのを待つほかに死傷者も出る。陸揚げされた食糧も底をつき、何の補給もない。

戦闘は、この空襲程度であった。終戦まで約一年の軍隊生活を南の島で体験する。米兵が上陸して全員武装解除、そしてマニラで捕虜収容所に収容される。

鯖江は歩兵第三十六連隊のあった町で、現在は「三六町」として町名が残っている。

すべく企図されていました。

その頃、エチアゲの部隊内では、良からぬ噂が流れていました。それは第四航空軍司令官・T中将がツゲガラオの飛行場より軍偵察機に乗り、台湾に飛んだらしいという信じられない出来事でありました。

後日、これは単なる噂ではなく事実で、護衛の戦闘機と共に一月十七日、命令によることなく台湾に飛んでいたと云うのです。日本陸軍史上、司令官が敵前退避したのは、あとにも先にもT中将ただ一人であろうと思います。

飛行場で軍刀を握り、高く上げ、若き少年飛行兵の操縦する特別攻撃隊機を見送っていたのですが、あれは何だったであろう？ 私も少年飛行兵第十期の出身であるが、苦々しく、またくやくしく、心外に堪えないことであります。

航空部隊をルソンの地に置いたまま離れて行った司令官は二度と帰ってこなかった。残された航空部隊は、内地より飛行機が輸送されてくるのを

悲運の航空部隊バレー峠で散華

岐阜県 和田 昇

私の生家は農業で父母、祖母に男四人、女五人の十二人家族の大世帯でした。

昭和十八（一九四三）年一月、満州チチハルの独立飛行第五十三中隊に赴任、その後第四飛行師団司令部に転属、昭和十九年五月「大陸令」により所属する第四飛行師団は第四航空軍の戦闘序列に編入され、フィリピンのマニラに進駐しました。

昭和二十年一月、師団は軍命令により司令部戦闘司令部をエチアゲに、主力はソラノ付近に転進、航空作戦の任務を遂行していました。そして一月九日、米軍はリングエン湾に上陸、ルソン各地で激しい戦闘が繰り返され、戦況は悪化の一途をたどっていました。

第四飛行師団は連日の戦闘で多くの飛行機を無くし、出撃可能な残存飛行機全機を特攻機に投入

待ち望んでいましたが、それは空しい願いでした。航空部隊は逐次、地上戦闘に投入されて行くことになったのです。

昭和二十年三月、第四飛行師団所属の将兵三百余人は、行く先、目的を明示されぬままトラックに乗せられエチアゲを出発、南進しました。途中オリオン峠に差しかかった際「地雷が埋設されている、ゲリラの攻撃がある」との情報が入り、トラックは徐行、警戒しつつ長時間かけて峠を通過して行きました。

サンタフェに到着、全員下車して密林の中に入りました。そこではじめて野戦補充隊を編成しバレー峠に行き、地上部隊と共に戦闘することが告げられたのです。編成された部隊は、臨時野戦第二補充隊で、部隊長・小妻修少佐、第一中隊長・内山鉄二郎大尉、第二中隊長・中沢孝一中尉、私は第二中隊第三小隊第一分隊長を命ぜられました。第三小隊長は小野島少尉（後日、石井曹長に交代）でした。私の第一分隊は甲斐伍長、横田伍長、大

城兵長、我孫子兵長、山本兵長、新井上等兵、松尾上等兵、加茂野上等兵の八人でした。

野戦補充隊員は、司令部では、電報班、通信班、整備班、また飛行場大隊で勤務していた関係で初めて顔を合わせる者ばかりでしたが、このときから同じ隊で戦うのだという真に迫った状況となり、思いつきり手を握りあい勇躍バレットの戦場に着きました。

金剛山の壕の中に入り、背囊その他の当面必要でない物を整理して置き、松尾上等兵を監視員として残しました。しかしその松尾上等兵は監視中、爆撃により戦死しました。部隊は妙高山に移り配置され、隊員は蝟壺を掘り、その中に入りました。

連日、砲爆撃を受けた数日後、我が分隊は敵の進攻を速やかに発見・報告すべき特命を受け、谷間に降りて洞窟に入り、哨戒の任に当たりました。

この頃から食糧が底をついてきました。わずかばかりの米を小分けし雑炊にして食べました。雑炊を煮る時には煙を絶対に出さないよう注意を払

いました。次第に体が衰弱してきて苦しい日々が続きました。

敵の砲爆撃の目標にされないために顔を真っ黒にし、口を飯盒につけるようにして、フウフウと吹き、火を燃やしました。バナナの芯や根っ子など何でも、口に入るものはすべて水炊きにし食べ、飢えを凌ぎました。

岩穴の中では、いつも内地で食べた「ぼた餅」のことや、白い飯に卵をかけて食べた話などを何度も繰り返し、もっぱら郷里を思い出していました。

昭和二十年三月十八日、谷間より引き揚げ、本隊に合流するよう命令があり、即日夕暮れの砲撃の止んだ時を見計らって岩穴から出て妙高山に登り始めました。

しばらくして谷の向い側の森の中から一斉に物凄い勢いで機関銃による攻撃をうけました。敵兵の姿は判らないが夢中で応戦、手榴弾を思い切り遠くに投げました。

私はこの戦闘で右腹部に貫通銃創を受け、傷口を包帯代りに巻脚絆でグルグル巻きにして山を登り、本隊に合流しました。休む間もなく峰から少し下りた斜面に横穴を掘り、その中に身を隠し、

穴の外側付近に倒れていた木を拾い集め覆いました。山の斜面には戦死者の遺体がたくさん横たわっていました。そこはどうすることも出来ない地獄の世界でありました。

かねてよりバレット峠には、満州から来た鉄兵団、撃兵団、それに高千穂部隊の精銳が配置され、勇猛果敢に戦っていると聞いていました。

山の尾根を中腰になり警戒しつつ行ったり来たりする伝令がいました。頭に汚れた包帯を巻いて通り過ぎて行く兵隊もいました。それらのものはすべて鉄兵団の兵隊でした。

毎日砲弾が飛んでくる。ヒュル、ヒュルと音をたて頭上を通り過ぎる。そんな時は、まだ大丈夫だが、そのうち「シュツ！ シュツ！」と鋭い音がしてくる。間近で炸裂する音である。大きな

声を出してわめき、死んでゆく兵士もいる。まるで修羅場であります。

一発の砲弾が、私の入っていた蝟壺の上で、「ガーン！」と炸裂しました。同時に私は、穴の中で飛び上がりました。直径四センチ位の真っ赤な破片が左大腿部に突き刺さりました。ジュジュと焦げて臭い、痛い。左手で体を支え右手で破片を取り除こうとしましたが、破片の表面はギザギザで熱くて触れない。とっさに手拭か上衣だったが覚えがないのですが、布らしき物をかぶせて取り払いました。無言でじっと堪え傷口を押さえました。傷口はザクロの様に開いていました。

その時はまるで気が狂ったようで鉄帽を頭に被っていると砲弾が胸に、いや腹に、顔に当たるような気がして心配で、一つしかない鉄帽をつぎつぎと位置を変えて置き換えながら身を守りました。

おびただしい砲弾が撃ち込まれ、多くの犠牲者が出ました。誰も負傷者を助けようとしません。いやとても出来ないのです。自分の事は自分で処理

するより仕方がなかった状況でした。妙高山の南の方の山中で、ガラガラとブルドーザーで山路を造っている音が聞こえてきました。戦車の通る路を造っている音でした。最後の決戦が近付いているのを感じていました。

第三小隊長である小野島少尉が体調を崩し、砲弾が炸裂する中を平気で敵の方に向かって行こうとするので、止む無く大城上等兵が付き添い後退していきました。後任には中隊付きの石井曹長がなりました。その後、小野島小隊長ら二人の消息は不明となりました。

四月十五日、小妻部隊は最後の決戦を覚悟し、北部妙高山に移動しました。私の分隊は敵を監視するため、一時そのまま残留しました。砲爆撃により山の木立はすべて倒され、土は掘り返されていました。私は二回の負傷で、汗と虱と蛆と血と土で傷口は腐敗し、蛸壺の中は異様な臭いがしてきました。

四月十九日、速やかに本隊に合流するようにと

いるため思うように体を動かせない。匍匐前進し、隣の横田伍長の蛸壺の中を覗き声をかけようとしたその瞬間、その日の第一波の攻撃が始まりました。

「しまった！ 大変だ」と思い自分の蛸壺に飛び込もうとしたが遅かった。物凄いく数の砲弾が、シュ！ シュ！ と音を立てて飛んで来る。

蛸壺の近くで大きな激しい炸裂音がする。頭上で炸裂した砲弾の破片が私の右腰部に当たりました。思い切り棍棒で殴られたような衝撃を受けひっくり返りました。気が遠くなってあとのこととは分かりません。

何時間かが過ぎた時、遠くで私を呼んでいるような声がしました。その声で気が付きました。誰かが穴の中に引きづり込んでくれたらしい。腰と腹に激痛が走る。右腰部に破片が当たり体内に入ったことは間違いないのだが、その破片がどこに止まっているか分からないのです。

しだいに不安になってくる。出血がある。苦し

の命令があり、敵の攻撃が止んだ隙を見て移動を開始しましたが発見されてしまったらしく、突然数発の銃声がありました。

誰かが「Aがやられた！」と叫びました。後方を振り向くとA上等兵が倒れていました。這いながら側に寄って見ると、胸を撃たれ、既に絶命していました。狙撃されたのです。急ぎ土をかぶせ襟章を形見にはぎ取り、その場を離れ、本隊のいる北妙高山に着きました。

またしても自分の鉄帽で蛸壺を掘らねばならぬ。体力が無くても自分の身を守る穴を掘るのだ。一生懸命です。皆夕方までに掘り終わり、その中に入りました。いつ敵が来るのか分からない。悲痛な気持ちでじつと蛸壺の中で早る気持ちを押さえつつ待機していました。

各人手榴弾をしっかりと持っていました。

四月二十一日朝四時頃であったと思う、まだ早いから敵の砲撃は無いだろうと思いつ分隊員を激励掌握するため蛸壺を出しました。大腿部を受傷して

い、そして無性に淋しくなってきた涙が出てくるのです。死ぬかも知れないという気がしてきて心細くなり、いろんな事を考えたり思い出したりしました。こうして苦しさに耐えて数時間が過ぎました。

傷口を押さえていたのでどうにか出血も止まりました。今度は何とかして生きたい。生きられると思うようになり少し勇気が出てきました。

夜になって砲撃も止まりました。石井小隊長が私の所に来て「たくさん死傷者が出たので、部隊長から重傷者を後方に移動させるよう命令が出た。みんなを誘導してさがってくれ」といって電報用通信紙にその旨書かれた「命令書」を渡してくれました。さがって行く者は何人で誰であるか分かっていません。

そして小隊長の合図で移動を始めました。重傷者といえども人の助けは受けられない。自力で動くより仕方がない。渾身の力を振りしぼり、暗闇の中を互いに言葉をかけ合ってさがりました。

重傷者の中に、マニラで一緒に勤務したことがあるH上等兵がいました。上等兵は足首が飛んしまいありませんでした。「連れて行ってくれ」と何度しも必死に叫んでいましたが、衰弱と出血多量で遂に途中で息を引き取りました。上等兵の血のにじむような声は六十年を過ぎた今も耳について離れません。

魔の山中を随分後退したようでしたが、その距離は恐らく四百か五百メートルくらいだったと思う。曳光弾が飛ぶ、動けないものは死ぬ。衰弱し、しかも負傷している者にとつては何倍も何十倍もの距離に感じたに違いない。重傷者はひとまず穴を見付け身を隠し、穴のない者は倒れている木のかげに隠れて横たわりました。

四月二十六日夜、形相物凄く興奮した兵士二人が私を探して来ました。そして穴の中に飛び込んで直ぐ「部隊全員やられました」と繰り返し報告しました。しばらくして少し落ち着き全滅の模様を話しました。

名前だったか、ずっと思いついていますが、今もって思い出すことができません。

山の麓に破壊されたトラックがあつて、その付近に粉が落ちていたのを発見、むさぼるように口に入れました。うまかつた。

サンタフェまで来ました。その付近には在留邦人や負傷兵が北に向かつてぞろぞろ歩いていました。中には元気な兵士もいて、昼は林の中に潜み夜になると歩き出すのです。疲労のためうっかり道端で眠ってしまうことがありました。油断すると携帯品は盗られる。靴も脱がされてしまう。もう誰も人間らしい根性は持っていなかったのです。パヨンボンを通りキアンガンの山にたどり着きました。そこには第四飛行師団司令部の将校や顔見知りの有田曹長の肥った大きな身体がありました。彼等はバレテ峠の悲惨な戦いの体験者ではなかったのです。

ニッパハウスの中には調達した粉がすっかり積み上げられていました。私は内心喜んで彼等の側

一昨日からどんだん砲弾を撃ち込まれ多くの者が死にました。今日敵が目茶苦茶に自動小銃や機関銃を撃ってきたので、銃を撃ち、持っていた手榴弾を投げて応戦しましたが全員戦死しました。「もうどうすることも出来ず、夜になって敵が後退して行つたので報告に来た」ということでした。

万策尽きたので私は意を決して、二人を使い、負傷者に「これから各人が自力で再び後退し、傷の手当をするよう」命じました。重傷の者たちに山の中を勝手にさがって行けということで、血も涙もない仕打ちですが、それが戦場での精一杯の策でした。どれだけの兵士が後退して回復したであろうか、神のみぞ知るということでした。

当時、妙高山で負傷するということは死を意味することでもありました。私は二人の兵士も含め負傷者と共に杖をたよりにバレテの山中を迷い歩き、専らさがり、そのうち独りになってしまいました。力のある者はどんだん先に退いて行きました。私の所へ報告に来た二人の兵士は何という

に寄り、妙高山の激戦の顛末を報告しようとしたが素っ気なくあしらわれ、多くを語ろうとせず、私の話を聞こうとしなかったのです。

当時の状況から考えて、バレテ方面より北に向かつて退避して来た邦人や負傷兵はたくさんいたに違いないのですが、その者達は皆「穀潰し扱い」で招かざる客でした。

私はまた独りで山野に食を求めて、その地を離れました。谷を流れる小川の中を歩いていると小さな声で「兵隊さん、兵隊さん」と呼んでいる女の子が二人、草むらの中にうずくまっていました。その横に長い髪を乱して死んでいる女がいました。きつと母親であつたに違いない。可哀想であつたがどうすることも出来ません。靴下の中に入れて持っていた貴重な米を幼い子に渡して、その場を通り過ぎました。

それから今度は山の麓で休んでいると、痩せ衰えた女の人が私の所に寄ってきて足にしがみつき、「米を下さい」と懇願してきました。断われきれ

ずに、靴下に半分程入れて腰にぶら下げていた粗を、身を切られる思いで与えました。女は涙を流して礼を述べました。粉は山の中の段々畑で摘み残されていたものを一粒、一粒集めて持っていたものでした。「お互いに日本に帰ることが出来たら知らせ合いましょう」と郷里の住所を紙片に書いて交換しました。

彼女はダイヤのついた指輪を持っていました。お札に上げると言って差し出しましたが、当時は指輪など全く関心がなく断りました。後日私が復員し分かった事ですが、その女性は「山田ふじえ」という人で私より一年早く内地に帰っておられました。マニラのパイパレデス、アベニダ、リサール街に住んでいて海軍下士官食堂の管理人として勤めていたというものです。そして内地に帰り神奈川県寒川町に住み、米軍キャンプで通訳をしておられ、再会し喜び合うことが出来ました。

昭和二十年九月に入り、毎日のように爆撃、銃撃に飛んできた飛行機がパツタリ来なくなり、戦

昭和二十年一月、師団は主力をソラノ付近に転進、航空作戦の任務を遂行していたが、一月九日、米軍のリンガエン湾に上陸後、ルソンは地上戦の激戦が拡大し、第四飛行師団は連日の戦闘で多くの飛行機をなくし、遂に航空要員であった執筆者はルソンでの地上戦闘部隊として戦った。

これより先、昭和十九年十二月中旬、敵のミンドロ島上陸によってルソン作戦の準備を急速に進めなければならなかった第十四方面軍が策定した作戦計画の中に次のような項目があった。すなわち、第四航空軍及び海軍航空部隊に対して、敵のルソン進攻時における敵船団の撃滅並びに上陸企図の偵知を要望すると共に、カガヤン河谷に航空基地を整備する、というものであった。すなわち昭和二十年元旦、第四航空軍は、第二、第七飛行師団を第三航空軍の指揮下に入れ、従来の寺内元帥の直轄から山下大将の指揮下に入って、カガヤン河谷のエチアゲに転進を命ぜられたのである。

昭和二十年一月九日、米軍のリンガエン湾に上

争が終わったことを知りました。

昭和二十年九月十九日、暑さと飢えと風雨を凌いだキアングンの山々に別れを告げ、すっかり自爆用に残し持っていた一個の手榴弾と、内地からずっと腰につけていた軍刀を、涙を流しながら米軍に渡し、武装解除を受けました。

妙高山で受傷し、砲弾の破片を体内に残留させたまま二百キロ余をさまよい歩き、杖をたよりに衰弱した体に鞭を打ち、遂にキアングン収容所に入った。

こうして私のルソンでの戦いは幕を閉じました。

【解 説】

体験記執筆者は、少年飛行兵第十期で、昭和十八年一月、満州千チハルの独立飛行第五十三中隊に配属され、その後、第四飛行師団司令部に転属、昭和十九年五月、第四飛行師団は第四航空軍の戦闘序列に編入され、フィリピンのマニラに進駐する。

陸に対処して、航空部隊は泊地の敵船団に肉弾攻撃を加え、第四飛行師団は、連絡機としてわずかに四機を残したに過ぎない激しい攻撃を加えたが、米軍の奔流を阻止することはできなかったという。

ここで執筆者が「これは単なる噂ではなく事実で、護衛の戦闘機と共に一月十七日、命令によることなく台湾に飛んでいたと云うのです。日本陸軍史上、司令官が敵前退避したのは、あとにも先にも丁中将ただ一人であろうと思いません」と語っているように第四航空軍司令官丁中将の台湾転進が起こった。事実、エチアゲは基地としての施設はなく、第四飛行師団は、方面軍の指揮連絡用の四機のみ、第三十戦闘飛行集団は一機も持たずに空中勤務員だけで、一月十五日にエチアゲに到着している。当時台湾には、内地からの補給飛行機が到着していたので、司令官は台湾において部隊の戦力を充実し、ルソン島作戦に当たるのが至当であるとの判断もあ